

毒茸

津木林 洋

「今晚、そっちに行ってもいいか」と彼から電話があった。

「奥さんの傍にいた方がいいんじゃない？」

彼の妻が肺癌で入院して一カ月。事が決着するまでは逢わないでおこうと決めていたのだ。

「怖いんだよ。女房がじっと俺を見るんだ」

「分かったわ」

彼は八時過ぎにやってきた。疲れた顔をしている。手料理にはほとんど口をつけず、ワインを少し飲んだだけだった。

ベッドで彼は彼女を抱き締めたが、それが儀礼的であることはすぐに分かった。それ以上何もしようとはしない。彼女はためらいがちに「奥さんが死んだらどうなるの」と彼の耳元で囁いた。

彼は腕を外し、天井を見上げると「分からね」と呟いた。

結局そのまま眠ってしまい、翌朝、会社に向かう彼と一緒に部屋を出た。

雨上がりの公園を歩いていると、芝生の中に白いものが見えた。何だろうと

彼女は立ち止まった。

茸だった。直径五センチほどの茸が三つ生えていた。透き通るような白さが

際立っている。こんなに綺麗なんだから、毒茸に決まってるわと思いつつも、

彼女は一つを手にとらずにはいられなかった。

彼は遠くの方でこちらを見ている。彼女は小走りに近づいていった。

「ねえ、これって毒茸よね」

その時、彼の携帯電話が鳴った。

「もしもし……うん、分かった、すぐに行く」

彼は携帯電話を折り畳んでポケットにしまうと、歩き始めた。

「誰から」

「娘から。危ないらしい」

彼女は思わず立ち止まった。彼の後ろ姿が遠ざかっていく。